

群 教 セ	I01 - 01
	平 29. 265 集
	特別支援教育

友達と遊ぶことの楽しさを共有し合える 幼児の育成

— 支援が必要な幼児と周りの幼児の

遊びと遊びをつなげる環境の構成 —

特別研修員 細野 直也

I 研究テーマ設定の理由

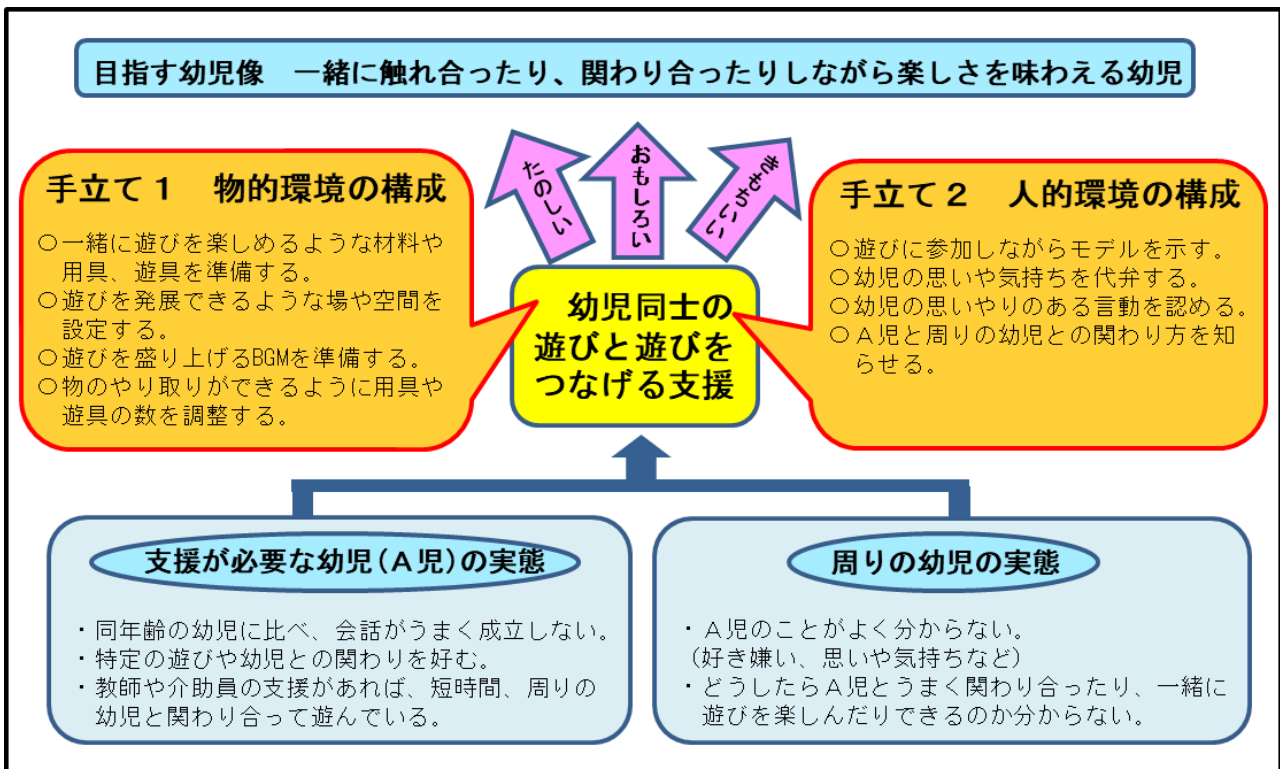
文部科学省の発表では、平成 28 年 5 月現在、義務教育段階において特別支援学校及び、小学校・中学校の特別支援学級の在籍者並びに通級による指導を受けている児童生徒が増加傾向にあり、幼稚園においても同様な傾向にあるとされている。本学級においても支援が必要な幼児（以下、A児とする）が在籍している。

幼児期は幼稚園という集団生活の場で遊びを通して、障害の有無にかかわらず周りの幼児と関わりながら対人関係を形成していく大切な時期である。しかし、A児は、人との関わり自体は好むものの、同年齢の幼児に比べると会話がうまく成立しないことから、自分を理解してくれる教師や介助員との関わりが多い傾向にある。また周りの幼児においては、A児の言動に疑問を感じたり、どのように関わりを持ったらよいか分からないにいたりする現状にある。

そこで、思い思いの遊びを通し、A児と周りの幼児とが一緒に触れ合ったり、関わり合ったりしながら楽しさを共有し合える関係作りの重要性を感じ、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 保育改善に向けた手立て

幼児同士の遊びと遊びをつなげるためには、環境構成の工夫が大切である。幼児の興味・関心などの見取りを基に、遊びに没頭できる材料や用具、遊具などを準備する物的環境の構成と、遊びを通し、A児と周りの幼児とが触れ合ったり、関わり合ったりできる人的環境の構成を工夫することにより、友達と一緒に遊ぶことの楽しさを共有し合える関係が形成され则认为る。

手立て1 物的環境の構成

- ・一緒に遊びを楽しめるような材料や用具、遊具を準備する。
- ・関わり合ったり、会話を交わしたりできるような遊びの場や空間などを設定する。
(例) 前回の遊びを継続して楽しめるように、CDデッキや遊びの場を設定しておく。
- ・物のやり取りができるように用具や遊具の数を調節する。

手立て2 人的環境の構成

- ・A児と遊んでいる周りの幼児に関わり方が分かるように、遊びに参加しながらモデルを示す。
- ・幼児同士の遊びと遊びをつなぐために、A児や周りの幼児の思いや気持ちを代弁する。
- ・A児や周りの幼児の思いやりのある言動を認め、言葉で伝える。
- ・A児と周りの幼児との遊びの輪に入れずにいる幼児に、関わり方を知らせる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 幼児の興味・関心などの見取りを基に、材料や用具、遊具を準備し、ちょうどよい数を見極め調整したり、会話を交わしながら、一緒に遊びを楽しんだりできるような遊びの場や空間を設定することで、A児と周りの幼児とで物の貸し借りや会話が生まれ、やり取りをする中で一緒に触れ合ったり、関わり合ったりする機会が増えてきた。
- 教師が遊びに参加しながらモデルを示したことで、周りの幼児がA児との関わり方を知り、身に付けていくことができ、より良い関係を少しずつ築けるようになってきた。
- A児の言葉にできない思いやうまく伝えられない気持ちを教師や介助員が代弁したことで、周りの幼児がA児の思いや気持ちに気付くことができ、言葉でのやり取りが成り立ったり、コミュニケーションを図ったりすることが少しずつ増えてきた。
- A児や周りの幼児の思いやりのある言動を認め、言葉で伝えたことで、幼児が自分自身の言動がよかったことを理解することができた。また、「Aちゃん」と名前を呼んでから「一緒に遊ぼう」などと優しく言葉を掛けたり、自分の使っていた材料や用具、遊具を見せながら「これ使う？」と尋ねて譲ったりするなどの姿が見られた。このような友達の思いやりのある言動に気付き、それをまねる幼児の姿が増え、学級全体が温かな雰囲気の中で友達の姿を受け入れられるようになってきた。
- A児と周りの幼児との遊びの輪に入れずにいる幼児もいたが、無理なく繰り返し遊びに誘ったり、教師がA児と周りの幼児と一緒に楽しそうに遊ぶ姿を実際に見せたりしながら関わり方を分かりやすく伝えたことで、少しずつ遊びの輪に参加できるようになってきた。

2 課題

- A児と周りの幼児との遊びの興味・関心が重なる材料や用具、遊具を準備し、遊びの場や空間などを考えて設定したが、物的環境の再構成をするきっかけやタイミングの難しさを感じた。場合によっては教師がイメージした遊びになってしまうこともあった。
- A児と周りの幼児との遊びをつなげようとするあまり、教師や介助員が必要以上に言葉を補う場面が多々あった。幼児同士の遊びの様子を見守ったり、幼児に任せたりすることの必要性を感じた。

実践例

1 活動名 「思い思いの遊び」（4歳児・8月下旬～10月上旬）

2 本活動について

思い思いの遊びとは、幼児が登園後に興味・関心のある遊びに取り組む時間である。遊びは戸外、室内それぞれで見られ、時間にして2時間程度である。遊びの中では幼児同士が触れ合ったり、関わり合ったり、会話を交わしたりする姿が多くあり、異年齢児が一緒になって遊ぶこともある。この思い思いの遊びを通し、A児と周りの幼児とが物のやり取りや会話を交わしたりしながら友達と一緒に遊ぶことの楽しさを共有し合える関係が形成されることが期待される。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

(1) 研究に関わる4歳児の教育計画

期	5	6	7	8	9
月	4月～5月	6月～8月中旬	8月下旬～10月上旬	10月中旬～12月	1月～3月
発達の過程	新しい幼稚園生活の仕方が分かり、安心して過ごすようになる時期	自分の思いを出しながら、気の合う友達と関わって遊ぶ時期	友達関係が広がり、いろいろな友達との関わりを楽しむ時期	友達との関わりが深まり、集団で行動することを楽しむ時期	友達との関わりの中で、互いに思いを受け止めながら遊びに取り組む時期
テーマと関わる幼児の姿	新しい環境に慣れ、親しみをもち、喜んで登園する。	自分のしたい遊びをしながら、教師や友達との触れ合いや関わり合いを増やす。	友達がしていることに興味をもち、まねたり、一緒にやってみたりする。	友達と触れ合ったり、関わり合ったりすることを楽しみ、自分からも関わろうとする。友達と一緒に表現活動に取り組み、楽しさを味わう。	友達と関わり、物のやり取りや会話を交わしたりしながら一緒に遊びを楽しむ。
研究に関わる活動	ごっこ遊び 移動遊具 固定遊具 砂、泥、水遊び ままごと ブロック など	しゃぼん玉遊び プール遊び ごっこ遊び 移動遊具 固定遊具 砂、泥、水遊び ままごと ブロック など	運動会ごっこ 秋の自然を生かした遊び 移動遊具 固定遊具 砂、泥、水遊び ままごと ブロック など	お楽しみ会ごっこ 簡単なルールのある遊び 縄跳び 移動遊具 固定遊具 ままごと ブロック など	伝承遊び 雪、氷遊び 縄跳び ごっこ遊び 移動遊具 固定遊具 ままごと ブロックなど

(2) 事前の活動→本時の活動→事後の活動

	ねらい	伸ばしたい資質・能力	幼児に経験させたい内容
事前	互いの幼児の思いや気持ちに気付かせたり、遊びをつないだりしながら、一緒に遊ぶ楽しさを味わわせていく。	周りの幼児 ○A児のありのままの言動を受け止め、関わり合う。 ・A児との遊びの中で、物のやり取りをしたり、会話を交わしたりする。	思いや気持ちをつなげながら、一緒に遊ぶ楽しさを味わわせたり、A児との上手な関わり合いを学べるようにしたりする。
本時	友達の遊びに興味・関心を示し、一緒に遊べるようにしていく。	・A児の遊びの様子を気に掛け、「Aちゃん」と名前を呼んだり「何をしているの」「一緒に遊ぼう」などと優しく言葉を掛けたりする。 A児 ○友達と一緒に遊びを楽しむ。	友達の姿や遊びをまねながら、周りの幼児と一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようにする。
事後	遊びを通し、友達との関わりを増やしたり、一緒に遊ぶ楽しさを繰り返し味わわせたりしていく。	・周りの幼児の姿や遊びの様子に気付く。 ・自分から友達に近づいたり、友達の名前を呼んだりする。 ・友達の話聞いて、自分の思いを表現する。 ・友達の姿をまねたり、友達と遊んだりする。	興味・関心を示した遊びを通し、友達との関わり合いを増やしたり、友達と一緒に遊ぶ楽しさを繰り返し味わえるようにしたりする。

3 本時及び具体化した手立てについて

本活動の期間は、8月下旬～10月上旬である。本時は10月上旬に行った。ここではA児と周りの幼児とが思い思いに遊ぶ場面において、以下の手立てを講じた。

手立て1 物的環境の構成

- ・二人乗り三輪車や牽引車など、一緒に遊びを楽しめるような材料や用具、遊具を準備する。
- ・運動会ごっこや秋の自然を生かした遊びを楽しめるような遊びの場や空間（ポンポンやCDデッキ、寿司ネタパネル、木の実、ビーズなど）を設定し、関わり合ったり、会話を交わしたりできるようにする。
- ・砂、泥、水遊びの場面で物のやり取りができるように、バケツやシャベル、コップなどの数を調節する。

手立て2 人的環境の構成

- ・A児と遊んでいる周りの幼児に関わり方が分かるように、遊びに参加しながらモデルを示す。
- ・「乗せて」「まけて」などA児や周りの幼児の思いや気持ちを代弁し、幼児同士の遊びをつないでいく。
- ・A児や周りの幼児の思いやりのある言動を認め、「ありがとう」「優しいね」などと言葉で伝える。
- ・「一緒に遊ぼう」と無理なく繰り返し誘ったり「『何をしているの?』って聞いてみる?」など、遊びに参加できるような具体的な言葉を伝えたりすることで、A児と周りの幼児との関わり方を知らせる。

4 保育の実際

(1) 事前の活動

A児は特定の女児と一緒に三輪車に乗って遊ぶことが好きで、その女児であれば、三輪車の貸し借りがうまく成り立っていた。しかし他の幼児には「三輪車が使いたい」「貸して」などと、自分の思いや気持ちを言葉で表現することができずにいたので、教師や介助員が代弁したり、必要な言葉を知らせたりしながらA児と一緒に思いや気持ちを伝え、周りの幼児とやり取りをしてきた。

(2) 本時の活動（_____は物的環境の構成、_____は人的環境の構成を示す）

① 物的環境の構成について

戸外の砂場脇に、幼児同士が物の貸し借りや譲り合いができるようにちょうどよい台数（10台程度）の移動遊具を配置した。A児が気に入って遊ぶことのできる遊具は三輪車である。一人乗りや二人乗り、牽引車が接続できるものなど、様々な種類の三輪車を準備し、遊びの用途によって選べるようにしておいた。また三輪車につながることのできる牽引車も準備し、A児と周りの幼児との遊びがにつながる機会が持てるようにしておいた。

A児が三輪車に乗って遊びを始めると、牽引車を持った男児が「くっつけていい?」と尋ね、A児もそれに応じて、三輪車と牽引車を合体させてつくった乗り物で遊びを始めた。その後、興味を示した男児2名が参加し、三輪車をこぐ、座席に座る、牽引車の後ろから押すという役割を交代しながら遊んでいた（図1）。



図1 乗り物合体

A児が三輪車をうまくこげず諦めると、周りの幼児がその思いを察し、役割を交代して遊びを続けた。遊びの途中、A児が周りの幼児を押しつけて座席に座ろうとする場面もあったが、教師が「ここに座りたいよ」「乗せて」という言葉が必要だというモデルを示すと、「乗せて」と周りの幼児に自分の思いを伝えることができた。その後、A児は座席を巡って周りの幼児と言い争い、じゃんけんをするが受け入れられず、自分の思いを突き通した。A児の姿を見た介助員が、周りの幼児に「A児がなかなか譲れなさそうだから、1回押し役を交代してくれる?」「そうしたら次は交代してくれるかも・・・」と提案すると、周りの幼児はそれを受け入れて遊びを再開した。次の座席交換の際には、介助員からの「次は交換できる?」の言葉を受けて、A児が座席を譲ることができた。

② 人的環境の構成について

園庭にある泥遊びコーナーでA児を含めた数名の幼児が遊びを始めた。A児は水を多く混ぜた流動状の泥をチョコレートソースに見立てて遊び、その横では男児が自分の納得できる硬さの泥団子を作ろう

と、水と泥の配分を調節しながら泥団子の素となるものを作っていた(図2)。A児は男児の遊びの様子を見て同じ遊びをしていると勘違いしたのか、一緒に遊びたいと思ったのか、自分の手元に置いてあったバケツの水を、男児の泥団子の素の中に注ぎ入れた。

男児：「うわ～、Aちゃん、水入れちゃだめだよ」

A児：男児の言葉を聞いて、慌てた表情を浮かべた。

男児：A児の取った行動に戸惑い、A児の思いや気持ちまでは気付けない様子だった。



図2 A児と男児の泥遊び

教師：「Aちゃんは、〇〇くんのお手伝いしたかったみたいよ」「水入れちゃだめだったんだね」「ごめんね」とA児のとった行動の思いや気持ちを教師が代弁して伝えた。

男児：「うん」

A児：自分がしたこと何が悪かったのか、分かっていない様子だった。

教師：「Aちゃん、〇〇くんは泥の中に水を入れてほしくなかったんだって」「〇〇くんに『お水入れてもいい?』って聞いたら、よかったね」「そうしたら、『いいよ』って言うってくれるかもね」と周りの幼児との関わり方や自分の思いを伝える方法が分かるように、モデルとなって示した。

A児：「ごめんしゃあ～い(ごめんなさい)」

男児：「いいよ」と快く受け入れた。

◇その後、しばらく遊びが続き、A児が男児に自ら話し掛けた。

A児：「お水入れていい?」とバケツを手にして、男児に聞いた。

男児：「いいよ。ここにに入れて」とお願いした。

◇A児の言動に気持ちよく対応できた男児はその後、自分の使っていたシャベルを「これ使っていいよ」とA児に手渡し、A児もそれを「ありがとう」と快く受け取り、一緒に遊ぶ姿が見られた。

(3) 事後の活動

物的環境の構成においては、その後も幼児同士が物の貸し借りをできるちょうどよい数を準備しておくことで、A児は教師や介助員のモデルを見て「貸して」「それちょうだい」などと思いや気持ちを伝えて、少しずつ周りの幼児との関わりを増やし、一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようになってきた。

人的環境の構成においては、遊びを通し、教師や介助員がA児の思いや気持ちを代弁したり、上手な関わり方をモデルとなって知らせたりすることで、周りの幼児がA児の姿や思い、気持ちに気付き、受け入れられるようになってきた。そのことでA児と周りの幼児の関わりが増えてきた。

5 考察

物的環境の構成では、材料や用具、遊具の数を調整したり、幼児同士が関わり合ったりできるような遊びの場や空間を設定したことで、A児と周りの幼児との関わり合いが見られ、「貸して」「いいよ」などの遊びに必要な会話を交わす姿につながった。しかし、材料や用具、遊具などの数の調整や新しい用具や遊具を加え、遊びを変化させる際には、幼児の様子や遊びの状況をじっくりと見極め、タイミングを計った上で環境を変化させることの必要性を感じた。

人的環境の構成では、教師や介助員がA児の思いや気持ちを代弁して伝えることで、周りの幼児が思いや気持ちに気付くことができた。また遊びを通し、教師や介助員がA児との上手な関わり方をモデルとなって伝えたり、A児に対する周りの幼児の言動を認めたりしてきたことも効果的で、A児のことを気に掛けたり、A児が喜んだり、A児にとってよいと思われる言動を繰り返したりする姿へとつながっていった。

A児においても遊びを通し、周りの幼児と関わる際に必要となる言葉を繰り返し学んできたことで、教師や介助員に促されなくても、自ら相手に対して「ありがとう」「ごめんなさい」「～でもいい?」などの言葉を掛けることが少しずつ増えてきた。一方、課題も残った。必要以上に教師や介助員がA児と周りの幼児との遊びをつなげようとしたり、思いや気持ちを代弁するために言葉を補ったりすることは、幼児同士の言葉でのやり取りや遊びのつながりをかえって断ち切ってしまうこともあった。幼児に任せ、遊びの様子を見守ることの大切さと教師や介助員が言葉を掛ける内容やタイミングの難しさを実感した。